

所 陵

No. 73

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



赤色あやめ文氷入

● 目 次 ●

『はくぶつかん』にみる昭和 50 年代前半の東大阪市立郷土博物館（上）・・・長谷 洋一	2
菅楯彦が追懐した明治初年の中之島と堂島・・・・・・・・・・米田 文孝	4
縁に表札「六畳一間」を掛ける住まい・・・・・・・・・・森 隆男	10
徳島藩史と郷町の町人・・・・・・・・・・吹田 僚	12

関西大学博物館

〒 564-8680 大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番 35 号

Tel. 06-6368-1171（直通） Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

『はくぶつかん』にみる昭和50年代前半の 東大阪市立郷土博物館（上）

長谷洋一

東大阪市立郷土博物館は、生駒西麓にある山畑古墳群の一角に建ち、昭和47年12月1日に開館した。同館は大阪府の市町村(大阪市を除く)で最も早く開設された市立歴史博物館である。展示場は小展示室(110㎡)と大展示室(255㎡)の2室からなり、主な展示資料としては市内各遺跡からの出土資料や河内木綿の下機^{しもはた}や旧大和川筋を往来していた井路川船などの民俗資料などが中心である。

筆者の手元には、東大阪市立郷土博物館が発行した『はくぶつかん』1号から19・20合併号までが揃っている。『はくぶつかん』は、昭和50年5月からほぼ隔月に発行・配布された市民向けのパンフレットで、B4版のわら半紙に、ボールペン原紙による謄写版で印刷したものを半分に折り、端をホッチキスで留めた数頁からなる刊行物である。内容は今日、各博物館が発行する「博物館だより」「年報」に近く、加えて館員の活躍や苦悩、同館を取り巻く諸事情がつぶさに綴られており、等身大の博物館の姿が投影されている。そこで、『はくぶつかん』を通して昭和50年代前半の東大阪市立郷土博物館についてみてみたい。

博物館設置の計画は昭和43年頃から地元有志から持ち上がり、博物館施設は篤志家の援助、協力によって昭和47年6月に完成した。8月に

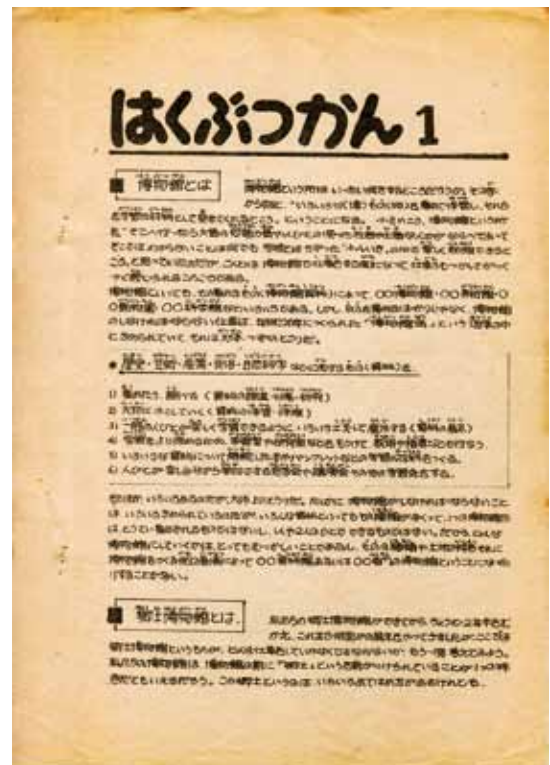


東大阪市立郷土博物館（現在）

は市役所（東支所）内に博物館開設準備室が設置され、11月下旬にはスタッフが博物館へ移りオープンを迎えた。開館記念展として「古墳—その社会と変遷—」（昭和47年12月1日～昭和48年3月10日）、特別展「古代の河内—河内に生きる人びと—」（昭和48年3月21日～6月10日）が開催された。

昭和48年7月以降は、常設展「東大阪市の年輪」を軸に、年1回の特別展が開催される。当時のスタッフは館長以下学芸員補3名を含む5名で、準備室の設置からわずか4ヶ月で開館、2本の特別展が連続して開催された。

さて、昭和50年5月1日に『はくぶつかん』1号が発行された。内容は、特集記事である「博物館とは」「郷土博物館とは」のほかに「博物館の台所」「博物館の主な活動」「河内の史跡をたずねて その1 博物館の周辺」「常設展示資料の紹介」「編集後記」からなる。編集後記では、「小さな博物館のより 重大な使命を目標にが



『はくぶつかん』1号



『はくぶつかん』 8号

んばって行きたいと思います。このため皆様方(ママ)の絶大なるご協力きょうりよくを賜たまわりたいと思います」と結んでいる。2号(同7月)からはこれに「河内かわらばん」と題した枚方市から河内長野市までについての歴史や文化に関する日記風記事が加わる。また3号(同9月)からは冒頭のタイトル下に特集記事に関する図面や地図、イラストを添えて表紙としている。

4号(同11月)では、「郷土博物館一開館3年目をふりかえって」の記事が組まれた。施設自体は十分な議論を経て建設された反面、博物館の質を作る各種資料・情報の収集や組織的な調査研究など基本的運営方針の検討を「公立博物館の地域での使命という十分な認識の上に立って行わず、そのままスタートさせた」ことや、館の運営が内部的な消化不良をおこしながら市民サービスと普及啓蒙の唯一の手段となってしまう特別展示を例年実施し、平常の館の質的向上、積極的な地域住民への働きかけに繋がらなかったことなどが反省点として挙げられている。

『はくぶつかん』もこうした反省にたって発行されたものと思われる。

特集記事は、考古学関係を中心に組まれたが、それだけではなく、大和川(6号・昭和51年3

月)や大和川の付替え(7号・同5月)など河内地方に関係するテーマのほか、ひなまつりとひな人形(6号)や寄贈資料の万葉植物(8号・同5月)、博物館周辺に現れるホンドリズ(10号・同12月)なども扱われバラエティに富んでいる。「郷土ということばには歴史・文化にとどまらず自然や風土そのほかあらゆるものが1つとなって郷土をつくりあげている」(1号)ことを具体的に示した内容となっている。

当時、展示事業以外に「はくぶつかん郷土史講座」(年6回)、親と子の史跡見学会(春・秋)、「はくぶつかん考古学教室」(年6回)が計画され、8号からは館員と共に郷土について学ぶ「はくぶつかん学習グループ」の募集を行っており、次号では中学・高校生による「河内考古学研究サークル」の発足が報じられている。こうした努力もあって9号(同10月)では発行部数500部の『はくぶつかん』1号～8号までの在庫がなくなったことを記している。

しかし人員と予算の問題は長く館員を悩ませる問題として報じられている。昭和50年度予算は890万円で、予算の約8割が「清掃・警備」「管理維持(光熱費)」に充てられて(1号)展示用予算が厳しいなか、7号では「さらに苦しかった台所」として、昭和51年度予算が前年比34%減の567.7万円となり、特別展示経費がゼロとなったことを伝えている。当時、ドルショック・オイルショックの影響を受けて市財政も低迷していた時期であった。

さらに10号では10月に専門職員(内館長兼職)2名が退職し、文化財課課長代理が博物館館長を兼務し、常勤スタッフが専門職員2、事務職員1という体制となっていた。

現在博物館で発行される「博物館だより」などでも、ここまで館員の本音や館の実情が市民向けに公表されている事例は稀であろう。『はくぶつかん』に綴られた平常展示の重要性や地域住民との交流、各種事業の多彩な展開、博物館をめぐる人員と予算の問題など、博物館を取り巻く諸事情は、40年を隔てた今日ですらあまり変わっていないように思えるのである。(続)

博物館長 文学部教授

菅楯彦が追懐した明治初年の中之島と堂島

米 田 文 孝

1. はじめに

近代大阪画壇を代表する画家のひとりである菅楯彦（1878～1963）は、明治・大正・昭和の三代を駆け抜けた。楯彦は大和絵風の歴史画や風俗画、とりわけ、はんなりとした情趣ある大阪の風物を主題とした一連の作品で知られる。今回は作品に記される画讃の元号から、昭和15（1940）年に制作されたことがわかる、明治初年の大阪中之島・堂島周辺の旧観を描いた「中之嶋蛸の松」と「堂島田簀橋」の双幅を紹介し、そこに描かれた堂島や中之島周辺の旧観を中心に、往時の状況を勘案してみたい。

なお、この双幅を制作した時期、楯彦は還暦を超え62歳を迎えていた。24歳の時に国学・有職故実を学んだ鎌垣春岡から、万葉集を出典とする楯彦という号を授けられていた。紀元2600年を迎えた昭和15年、楯彦は「國の御楯」をはじめとする時局に即した国粹的な主題の作品を制作する一方、この双幅をはじめとする懐古的な作品の制作も行っていた。

2. 作品の概要

表装からみると、「中之嶋蛸の松」と「堂島田簀橋」は、ともに三段（大和）表具・幀櫛^{どうほうえ}で仕立てられており、軸先は象牙である。両作品は同寸の横幅一双であり、本紙は同寸（縦21.0cm × 横31.0cm）の絹本著色である。楯彦の画風は細部に拘泥されない輕妙・簡潔な線描と、鮮やかな色彩の共存を特徴とする。しかし、

本作品は色紙とほぼ同寸法である小さな画面（651cm²）に雄大な風景を精緻に描き込んでおり、あたかも細密画を彷彿させる繊細な筆致で風景や人物を描画するなど、やや趣を異にした作風である。また、楯彦の作品は同名同工のものがあることを特徴の一つとするが、管見によれば、本双幅と同類の作品は見当たらない。

さて、双幅は共箱（二重箱）に収められ、匣蓋表には画題をその右側に「中之嶋蛸の松」、左側に「堂島田簀橋」と列記されている。匣蓋裏には「浪速御民楯彦」の墨書と、横書の白文方印「楯彦」（縦2.4 × 横2.3cm、『没後五十年菅楯彦展』図録印譜集〔以下同じ〕姓名印No.57、近藤尺天作、1923年以降）の落款がある。

また、「中之嶋蛸の松」の画面右端には「是浪花中之嶋明治初年旧観也余幼時屢過此潯眼底今猶存当時景觀今画以静追懐」の画讃があり、下端には関防印の白文方印「漱瑤泉」（縦1.05 × 横0.55cm、印譜集関防印No.19、河西笛州作、1932年以降）の落款がある。同じく、左端には「庚辰青陽浪速御民楯彦」の墨書と、縦書の朱文方印「楯彦」（縦1.05 × 横0.55cm、新出）の落款がある。「庚辰青陽」から本作品は昭和15（1940）年春、前記したように楯彦62歳の作品であることが判明する（写真1）。

つぎに、「堂島田簀橋」の画面左端には、「自堂嶋南畔隔玉江橋望中之島北涯誌曰元禄十一改堀江橋称玉江橋明治初年橋上遙仰見大阪城及荒陵塔」の画讃と、縦書の朱文方印「楯彦」（縦



写真2 「堂島田簀橋」



写真1 「中之嶋蛸の松」

2.0×横0.7cm、氏名印No.47、河西笛州作、1935年以降）の落款がある。また、画面右端下には「中之嶋蛸の松」と同一の関防印「漱瑤泉」の落款がある（写真2）。「玉のごとく美しい泉に口そそぐ」の意である「漱瑤泉」は、唐・李白の詩文によるものと思われ、楯彦の博識を示す一例である。楯彦は明治31（1898）年から山本梅崖の梅清処塾で漢学を学びはじめたが、その後も国学・有職故実を鎌垣春岡に学ぶなど、画業以外に幅広く古典を中心に修学した。

双幅には別途、絹本の短冊1枚が添えられている。この短冊（縦21.5cm×幅4.0cm）には「是明治初年浪花中之嶋北畔旧観而往時久留米藩蔵屋敷之浜也涯上老松称蛸之松右云田蓑橋向岸為堂嶋余幼時屢過此潁眼底今猶存当時景観乃画以静追懷」と墨書されており、双幅と共通する関防印「漱瑤泉」の落款がある。

つぎに、双幅に描かれた「旧観」をみると、「中之嶋蛸の松」は久留米藩蔵屋敷を背にほぼ北方向、同じく「堂嶋田蓑橋」は玉江橋北詰からやや西方の人吉藩（肥後・相良氏）と臼杵藩（豊後・稲葉氏）の蔵屋敷の境界付近から、ほぼ東南東方向の視野を描いている。その視角は両作品とも約75°であるが、画面の周辺部をぼかして表現していることに對し、中央部の約50°は鮮明に描かれている。これは35mm判カメラにおいて人間の目で見た画角に最も近いとされている標準レンズ（焦点距離50mm）の画角約47°に近似している。この観点からも、楯彦がその幼少時、実際にみた景観を如実に描いていることの証左の一つになろう。図版は、上記の両作品が描く視野を示したものである。



図版 「中之嶋蛸の松」と「堂嶋田蓑橋」の視野

3. 「中之嶋蛸の松」について

本作品は楯彦が画讃に記したように、その幼時にしばしば往来した中之嶋と、そのとき眼底に焼き付いた名松「蛸の松」を題材にした作品である。楯彦（幼名藤太郎）は鳥取県で生誕したが、父・菅盛南（大次郎）は陶器絵付指導のため姫路・赤穂へと移り、さらに大阪で襖絵専門の絵師となった。ときに明治14（1881）年、楯彦が3歳を迎えた年であった。楯彦は、作品にある画讃と短冊からその幼年期、中之嶋の堂嶋川北岸にあった「蛸の松」付近をしばしば往来し、脳裏に焼きついた商都大阪の中心部の景観や印象を旧観として画像化し、「中之嶋蛸の松」として制作したことがわかる。

この蛸の松（多幸の松）は、元和6（1620）年から幕末まで11代続いた有馬氏の久留米藩（22万石・天保期）大坂蔵屋敷の浜にそびえ立っていた大樹老松である。その四方に伸びる枝振りが、海中を遊泳する鮪を彷彿とさせる樹形であるとして名付けられ、当時の風流人に愛でられた。『摂津名所図絵大成』（巻之十・蛸松の項）には、「同所の浜辺にあり。枝葉繁茂し、四面にたれて恰もたこに似たるを以て名とす。頗る大樹の名木なり。此辺すべて河岸にして景色もつとも絶勝なり」とある。

蛸の松の東隣に蔵屋敷を構えた広島藩（43万6千石・天保期）の浅野氏は、元和5（1619）年から幕末まで12代続いたが、広島城無断修築の罪を問われて改易された、前藩主の福島正則がこの松を植えたという伝承から、毎年10石の扶持米を与えてこれを維持した。

江戸時代、各藩は年貢米や所産物を販売するため、全国的な商業拠点である大坂や江戸、京都などに蔵屋敷を置いた。蔵屋敷は蔵米・貢租米を格納し、大坂では米切手（蔵荷証券）の売買所である北浜、次いで堂嶋の米市場に近い堂嶋川両岸に蔵屋敷が置かれた。大坂で建てられる米価は全国を目安として、「諸色相場の元方」といわれた大坂の商品相場の中心となっていた。諸藩の蔵屋敷は、白壁となまこ塀、蒼々たる松樹、藩の格式に応じた長屋門を備えており、独特の景観を形づくっていた。

作品に目を転じると、画面には久留米藩蔵屋敷を背にして北方、堂嶋川南岸の雁木（階段状の船着場）上にそびえ立つ蛸の松を描いている。

その背後には、田蓑橋とその北詰、堂島南岸の家並みが描かれ、さらに遠方には北摂の山並み（箕面山まで約17km）が配されている。雁木の汀付近に釣り人が3人、鯊釣りでも楽しんでるのである。路上には東に向かう「棒手振り」と呼ばれる行商人や、樽の箍を転がし遊びながら進む丁稚、振り返る少女と手をつないだ女性が描かれる。また、西に向かう人びとには男性や邏卒（警察官）が描かれるが、注目できるのは左端部分に棒手振商人と対向して、行き違うように描き込まれている職人である。この職人が肩に担っているのは襖と想定でき、襖絵を専門とする絵師であった父・菅盛南の姿を配し、追慕の念を新たにしたのかもしれない。

なお、幕末までは蛸の松を境に上流（東）側は本五分一町、下流（西）側は常案裏町と呼ばれていた。常案町と土佐堀川に架かる常安橋の名称は、淀川の改修や低湿地であった中之島の開拓に尽力した豪商、初代淀屋与三郎（常案）に由来している。江戸時代初期、二代淀屋个庵は土佐堀川に私費で淀屋橋を架けた。その南詰には淀屋の「屋敷百軒四方」と称された1万坪にも及ぶ屋敷が広がり、軒先から梶木町（現・北浜4丁目）付近で淀屋米市が開かれていた。

元禄10（1697）年、米市は堂島新地の開発とその繁盛策により堂島（現・北区堂島浜1丁目、新ダイビル付近）へ移転、享保15（1730）年には公許の堂島米会所に発展した。ここでは、正米取引（現物取引）と帳合取引（先物取引）の両者が行われていたが、整備された世界初の先物取引市場であった。

画面に戻ると、堂島川の川面には2名の水夫に操られる、10～20石積の小運搬船である上荷（茶）船が描かれている。上荷船は外航船から積み替えられた荷を吃水線低く満載して、上流に向かって遡る。この上荷船が往来する河川に面した蔵屋敷では、浜地（雁木）に沿って設けられた荷上場から直接、荷揚げした藩もあったが、水流に煩わされないことを目的に、蔵屋敷構内に入堀（御船入）を掘削して、荷揚げの便を図った藩もあった。久留米藩をはじめ、広島藩、鳥取藩、高松藩、鍋島藩などの諸藩がある。入堀の上部には、荷物を嵩高く積載した舁（はしけ）を効率よく構内に搬入するため、路面が高く太鼓状を呈した入堀橋が架けられた。この入堀橋は、

一般の人びとの通行も許していた。

現在、大阪歴史博物館に寄託されている「久留米藩大阪蔵屋敷絵図」（以下、久留米藩絵図）には、この蛸の松を堂島川（北）方向から描いた絵がある。この作品は天明元（1781）年、初代神崎屋宗兵衛が大坂鞆（京町堀）に海産物（三町）問屋として創業した合名会社神宗が、家宝として所有されてきたものである。四条派の画家である眉山玉震が、慶応3（1867）年に描いたものであるが、美術史的観点からはもとより、幕末期の蔵屋敷の様相を具体的に描出する資料として、経済史・風俗史的観点からも貴重である。当初は38図の紙本淡彩画に眉山玉震と玉手眉山誌の序文が添えられ、「御田祝」と題簽が付された画帖仕立てであったが、その後、屏風（六曲一双）に仕立て直されている。

その中で、蛸の松を描いた作品（縦27.5cm×横43.0cm）は、この屏風を調査された宮本又次氏により、「蛸の松と久留米藩蔵屋敷」と命題された（写真3）。画面の構成をみると、その中央部の雁木上面からそびえ立つ蛸の松の大幹、上方で分岐して川面に向かい垂下する大枝を描き出している。蛸の松の幹には、注連縄が掛けられている。その下、駕籠の供まわりが蔵長屋門を出るところが描かれているが、藩主有馬侯の大坂滞在の姿を描いている可能性もある。蛸の松の背景には久留米藩蔵屋敷の白壁が描かれ、蛸の松の枝振りを浮き立たせている。また、右端には蔵屋敷内へ通じる御舟入に架かる入堀橋（久留米橋）と、構内へ至る木門が描かれている。

この蛸の松は、あらゆる人に河岸絶景の第一として賞賛されたと伝わり、幕末期以降の浮世絵や地図、写真に記録されている。例えば、幕末の経済都市大坂の名所旧跡を主題とする『浪



写真3 蛸の松と久留米藩蔵屋敷

花百景』のひとつに、「蛸の松夜の景」(国員画)がある(写真4)。この『浪花百景』は、文久～慶応年間(1861～67)に刊行されたと推定されている。「蛸の松夜の景」は堂島川の船上、あるいは堂島南岸、田蓑橋の北詰付近から西南方向を眺望した構図で描かれている。

ここで「蛸の松夜の景」の画面構成をみると、その左端の雁木の上面から伸び立つ蛸の松の大幹、さらに分岐して川面に垂下する大枝を描き出している。蛸の松の背景には久留米藩蔵屋敷の白壁が描かれ、蛸の松の枝振りを浮き立たせている。画面の右端には、蔵屋敷の敷地内部へ通じる御舟入に架かる久留米橋が描かれており、その路面中央部の高まった上空には満月が煌々と輝いている。なお、大阪府立中之島図書館には画帖仕立て、和泉市久保惣記念美術館には冊子体で、菅橋彦旧蔵の『浪花百景』が所蔵されており、「中之嶋蛸の松」・「堂島田蓑橋」の制作時に参照された可能性がある。

また、安政2(1855)年に刊行された『浪華の賑ひ』中の「蛸松(蛸の松)」は、堂島川の対岸から蛸の松と久留米藩蔵屋敷を描いたもので、北方からみた蛸の松の全貌がわかる。また、蔵屋敷のほぼ中央に掘削された御舟入に架かる入船橋(久留米橋)も描き出されている。この橋と蛸の松を玉江橋の方向(西南)から撮影した写真では、田蓑橋を遠望できる(写真5)。

後年に同様の画角で撮影された写真では、久留米橋の欄干が鋳物製になるとともに、路面が平坦に拡幅された橋に架け替えられており、もはや御舟入はその役割を終えていることがわかる。また、この写真の反対(西北)側、広島藩の御舟入に架かる入船橋を前に蛸の松を撮影したものでは、堂島川に架かる玉江橋が遠望できる(写真6)。田蓑橋と比較した場合、下流(西側)に架橋された玉江橋の橋脚は高く、中央部分の橋脚間を広げていることがわかる。これは嵩高く荷物を積み、ときには帆を掛けた上荷船の往来を容易にする工夫であろう。

なお、明治44(1911)年に刊行された『大阪地籍地図』では、すでに久留米橋や蛸の松の表記はなく、このときまでに蛸の松も伐採され、蔵屋敷への入堀も埋め立てられたのであろう。その後、久留米藩の蔵屋敷跡は大阪師範学校、中之島小学校と大倉商業学校、大阪大学本部・

歯学部へと、また広島藩の蔵屋敷跡は大阪医学校、大阪大学医学部へと順次、その敷地が利用された。

なお、蛸の松から東方向、旧肥後町(現在の中之島2丁目付近)の河岸にも、「売買の松」と呼ばれた名松があった。その枝振りが手を延べて物を売ろうという人の姿に似ており、旧堂島米市場の大川を隔てた真向かいにあることを由来として命名されたというが、この名松も蛸の松と同時期に、その姿を消したらしい。また、蛸の松から西方向、大阪高等工業学校前(旧玉江町1丁目)の堂島川南岸に、あたかも大空を飛翔する鶴の姿と見紛う「鶴の松」があった。



写真4 『浪花百景』中の「蛸の松夜の景」



写真5 蛸の松と田蓑橋



写真6 蛸の松と玉江橋

4. 「堂島田蓑橋」について

本作品は画讃に記されたように、堂島南岸から堂島川を跨いで堂島と中之島を結ぶ玉江橋と、その背後に広がる遠景を描いた作品である。画題である田蓑橋の名称は難波八十八島の一つ、田蓑島に由来すると伝える。田蓑橋は玉江橋の上流(東方)、約260m離れて架橋されている。玉江橋と田蓑橋は、幕命による河村瑞賢の治水事業に関連した元禄年間(1688～1704)の堂島開発により、新たに架橋された堂島五橋(上流東方から大江橋・渡辺橋・田蓑橋・堀江橋・船津橋)である。瑞賢はこのとき蓄髪して平大夫と改名していたが、安

治川や堀江川の掘削をはじめ、経済都市大坂の諸機能の維持・拡大を図る諸事業を進めた。

なお、楯彦の画讃にもあるが、堂島五橋の一つである堀江橋は元禄11（1698）年、堀江新地が造成され堀江橋が架けられたため、玉江橋に変更された。玉江橋という名称は、堂島川の上流で瓊（赤い玉）が発見されたため神霊として祭られたが、この珠玉の発見に因むという。宝永4（1707）年刊の地図「摂津大坂図鑑綱目」には、この名称の変更が反映されており、すでに玉江橋と表記されている。

楯彦の作品に目を転じると、その画面中央部左右に描かれた玉江橋は木造橋で、中央部が大きく膨らむ。堂島川の川面には投網を打つ屋形船と、菰巻きの荷を運ぶ上荷船の2艘が描かれる。橋上を行き交う人力車の後方の対岸には蛸の松、その遠方には大阪城が描かれている。また、画面の右後方には荒陵塔（四天王寺の五重塔）が見え、背後には生駒の山並みが、右端には二上山が描かれている。飛鳥時代に創建された五重塔はたびたび罹災・焼失した。楯彦が見た五重塔は文化9（1812）年に建立され、昭和9（1934）年の室戸台風で倒壊した（写真7）。

また、玉江橋の橋上からは、明治20（1887）年ごろまで、四天王寺の五重塔や大阪湾を往来する帆船、西摂の中山寺が遠望でき、大阪市中の不思議の一つに数えられた。『摂津名所図絵大成』（巻之十・玉江橋の項）には、「当橋は裏川五橋の内第四にあたれり。川幅広く兩岸はす



写真7 楯彦が見た四天王寺の五重塔

べて諸侯御蔵やしきにして、風景絶勝なり。殊更此橋上より、天王寺の大塔を正面に眺望す。所謂浪花の一奇観なり。」と記された。『浪華の賑ひ』（鮎俣）にも、同様の画讃が記されている。

また、久留米藩絵図の中にも、玉江橋を俯



写真8 「久留米藩大阪蔵屋敷絵図」中の「玉江橋」

瞰して、蛸の松と東側の広島藩蔵屋敷と広島橋、西側の久留米藩蔵屋敷と久留米橋を描いた「玉江橋」がある（写真8）。橋面が湾曲する玉江橋の橋上では、袴を着けた武士が行きかい挨拶を交わす姿が描かれているが、蔵役人や留守居役、あるいは新年廻礼の有様を表現しているであろう。また、木橋である玉江橋の高欄や束柱、地覆、橋脚などの、その構造に関する詳細を知ることにも可能である。

この玉江橋から堂島の北岸に至り、蜷川（曾根崎川）を跨ぐ浄正橋の北詰に近接した西方に、かつて「逆櫓の松」と呼ばれる名松があった。逆櫓の松は、『摂津名所図会』（福島天神の項）によると、上福島橋爪町の杵本家別荘の庭にあったという。この場所は源義経と梶原景時とが逆櫓について論争した場所とされている。『平家物語』の文治元（1185）年2月、讃岐の屋島に陣取る平家を討つため出陣する場面で、この逆櫓問答が記され、歌川国芳が浮世絵（木版・大判3枚続）として制作した。

『浪花百景』中の「福しま逆櫓松」（芳瀧画）にはその姿が描かれる。この画面では、堀に取り込まれた樹幹が地上高約2.5mで切断されている姿が描写されており、逆櫓の松はすでに枯死している（写真9）。その上部には腐食防止のため、小屋根で覆われている。小屋根の端部には注連縄が飾られ、5枚の絵馬が釣り下げられている。また、堀の上部には、逆櫓の松の由来を示していると推測できる扁額が掲げられている。明治20（1887）年頃に撮影された写真では、絵馬は堀にまとめて釣り下げられ、扁額も辛うじて掲げられている（写真10）。

この逆櫓の松が面していた蜷川の旧流路は現在、埋め立てられて道路となっているが、元禄年間には蜷川の南岸一帯には「堂島新地」が、

宝永年間には北岸一帯に「北（曾根崎）新地」が誕生した。近松門左衛門作の浄瑠璃世話物の「曾根崎心中」や「心中天の網島」の舞台となった場所である。埋め立ての理由は明治42（1909）年、付近一帯を焼き尽くした大火、いわゆる「北の大火（天満焼け）」である。この大火により、蜷川の上流は瓦礫捨て場となり、明治末年までに埋め立てられた。また、下流部分も大正時代の終わりまでには埋め立てられ、蜷川はその姿を消した。

5. おわりに

「中之嶋蛸の松」と「堂島田簀橋」に遺された画讃と短冊には、これらの作品に込められた菅楯彦の思いが吐露されており、詩画一致の境地を示している。あわせて、明治初期の大阪中之島・堂島界隈の景観を復原するためにも、有益な資料を提供している。

画題の一つとなっている蛸の松をはじめ、鶴の松や売買の松など名松大樹が姿を消した理由には、社会構造の変化から庇護者であった蔵屋敷がその機能を失い、取り壊されたことがある。



写真9 『浪花百景』中の「福しま逆櫓姿」



写真10 逆櫓の松（明治20年頃）

さらに、大火がこれに追討ちをかけたものと推定できる。近世の大坂では、三度の大火と呼ばれる「妙知（智）焼け〔1724年〕」・「大塩焼け〔1837年〕」「新町焼け〔1863年〕」をはじめ、しばしば大火に見舞われた。中之島・堂島地区の罹災状況からみると、天保5（1834）年に堂島新地北町（現・北

区堂島中）より出火した大火があるが、文久3（1863）年に刊行された「国宝大坂全図」には、蛸の松らしき大樹が表記されていることから、焼損は免れたらしい。

しかし、明治44（1911）年に刊行された『大阪地籍地図』には、旧久留米藩蔵屋敷跡の大阪大倉商業学校と、旧広島藩蔵屋敷跡の大阪病院との境界付近の堂島川南岸には、蛸の松を挟んで設けられた旧久留米・広島藩の御舟入や入船橋、蛸の松の表記は見当たらず、『大阪地籍地図』の作成時までに御舟入は埋め立てられ、同時に入船橋も撤去された。蛸の松をはじめとする名松大樹は、明治42（1909）年の「北の大火（天満焼け）」後、その姿はすべて失われた。

もう一つの画題である橋梁をみると、耐用年数や鉄橋化による架け替え、明治18（1885）年の淀川洪水などによる流出、大火による焼失など、短期間でその姿を変えた。大大阪の経済力を背景に、現在は近代化遺産として登録有形文化財として保存・活用される名建築が次々と建てられ、菅楯彦が双幅を描いた昭和15（1940）年頃には大きく景観を換えつつあった。もはや、楯彦が幼少時、眼にした前近代的な景観は失われ、追懐の彼方に過ぎ去っていた。

【主要引用・参考文献】

暁鐘成1976、『摂津名所図会大成』（其之二）、柳原書店
秋里籬嶋1798、『摂津名所圖會』、柳原喜兵衛
倉吉博物館1997、『浪速の雅人 菅楯彦』、同博物館
サンケイ新聞社1987、『写真集 おおさか百年』、同新聞社
島田清編1986、『写真集大阪（下）』、国書刊行会
菅楯彦顕彰会1973、『画聖 菅楯彦名作大成』、同顕彰会
鳥取県立博物館2014、『没後五十年 菅楯彦展』、同博物館
鶏鳴舎暁晴翁編1855、『浪華の賑ひ 三篇』、河内屋喜兵衛
浪花百景刊行会1976、『浪花百景』、立風書房
宮本又郎1977、『大阪の蔵屋敷と堂島米市場』『大阪春秋』13号、大阪春秋社

読売新聞大阪本社社会部1985、『浪速写真館』、朋興社
脇田修監修2015、『近世刊行大坂図集成』、創元社

なお、画讃の読解では、関西大学文学部小倉宗氏にご教示を賜った。銘記して篤く感謝申し上げます。

縁に表札「六畳一間」を掛ける住まい

森 隆 男

はじめに

表札は一般的には玄関に掛けられているが、岡山県の吉備高原には縁の鴨居に掛けられている住まいがあった。筆者は昭和50年代に当地を訪れた際、このような事例を見たことがある。このたび岡山県高梁市有漢町で、地元の研究者秋葉将氏（1939年生まれ）の案内によって表札の実物と痕跡を残す住まいの調査をすることができた。

縁に表札を掛ける習俗はそこが正式な出入口であることを示しており、玄関が普及する以前の住まいの構造を考えるうえで貴重である。とくに今回は「六畳一間」と書かれた謎の表札を見学することができ、あらためて住まいの出入口の意味を考える機会になった。

1 島田保弘家と表札

島田保弘家は高梁市有漢町長代に所在する、屋敷の周囲に広大な田畑を所有する資産家である。近代になって大規模な養蚕業を営んだことが、母屋の背後に長屋形式の養蚕場を設けた写真が残っていることからわかる。母屋は茅葺入

母屋の食い違い六間取りの住まいで、明治10年ごろの建築と考えられている。棟にはオドリと呼ばれる7本の棟押えがのせられている。

図の間取り図は、聞き書きによってかつての土間の様子を復元している。オモテ側に正式な客の対応や儀礼の場であるデイノマ、次の間の機能をもつナカノマ、他の事例ではイタバと呼ばれている板敷のアガリノマが並ぶ。デイノマには仏壇と、伊勢神宮や氏神の神札を納めた神棚が設けられている。またウラ側にはいろりを切ったイロリノマ、広いアダナンドと狭いオクナンドが配置されている。土間のオモテ側はアガリノマと一体的に使用された屋内の作業空間であろう。ここには大竈が据えられている。ウラ側は調理場や竈が設けられた台所である。大黒柱付近には火の神であるロックウサンが祀られている。

さて当家では濡れ縁が内縁に改造されているが、ナカノマの前の鴨居には表札を掛けた2か所の釘穴が残っている。幸い2点の表札が親戚にあたる秋葉氏のもとに残されていた。うち1点の表札は島田氏の祖先の名前が、もう1点に

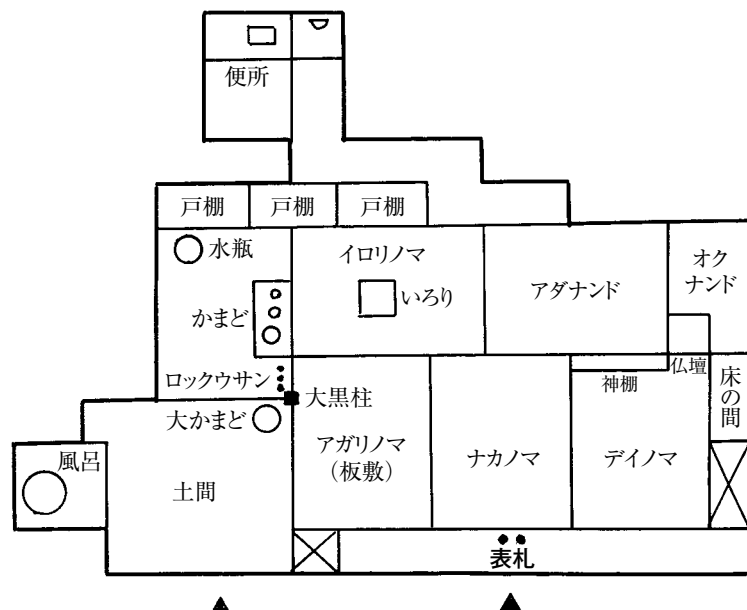


図 島田保弘家間取り図（原図は秋葉将氏作成）



写真1 鴨居に掛けられた表札
(右「六畳一間」、左「島田某」)

は「六畳一間」と読める文字が記されている。ちなみに前者の木札は長さ14.9cm、幅4.3cm、厚さ1.1cmで、後者は長さ12.3cm、幅10.5cm、厚さ0.7cmである。ともに杉材で、長年風雨に曝されていたため墨書の退色が著しい。

2 出入口の使い分け

島田家では、人の出入りは基本的に縁から行われた。当家には大正10年ごろに撮影されたと思われる写真が残っており、老人が縁から出入りする姿が写っている。ここはアガリノマにつながる場所で、当時家族の日常的な出入口であった。アガリノマという呼称もこの部屋の機能を端的に示している。土間への入り口を日常的に使用するの、クミカワと呼ばれる浅い井戸から水を運び込む主婦ぐらいであったという。

表札が掛かっていた場所は、日常的な客の出入口であった。また秋葉氏の夫人は当家の出身で、婚礼の出立の際にナカノマから縁を経て



写真2 大正10年頃の島田家

直接庭に出たことを記憶されている。当家に嫁いだ女性もこの場所から屋内に入ったという。一方、僧侶や神職の出入りと出棺はデイノマの縁が使用された。このように当家では表側の3部屋と土間それぞれに計4か所の出入口があったことになる。

この地域では比較的遅くまで広間型の間取りが残存し、整形四間取りへの変化は当家が建築されたのと同時期の明治初期であったとされている。秋葉氏が昭和50年ごろに調査した同じ地区の大森家では、家族の居室に加えて接客の場であった広間に相当する広い部屋の前の鴨居に表札が掲げられていた。島田家も再建以前は広間型の間取りをもつ住まいであった可能性が高い。表札が掛けられたところは広間に直接出入りする、玄関に相当する場であった。なお部屋に直接出入りする感覚は、やはり玄関をもたない南西諸島の住まいに共通する。

3 表札「六畳一間」の意味

「六畳一間」と記された木札について、秋葉氏は客のもてなしが可能な畳敷きの部屋があることを示すと同時に家格を示すものであったと解釈している。集落の旧家である当家にのみ残っている点からも妥当であろう。

武家住宅の式台玄関をあげるまでもなく、客を迎える玄関はその家の格式を表す重要な設備であった。村の旧家である島田家に玄関が見られなかったのは、当地では接客を前提にした家格表示の設備が未発達であったからであろう。このように考えると前出の「六畳一間」と記された木札が、それを補う役割を果たしていたとみていいだろう。

庶民の住まいに接客の設備として玄関が普及していく過程を具体的な事例で検証するとき、島田家に残された「六畳一間」の木札が重要な資料であることは間違いない。

(参考文献)

- ・有漢町文化財保護委員会編『有漢の民俗』
有漢町教育委員会 1980
- ・土井卓司・佐藤米司『日本の民俗・岡山』
第一法規出版 1972
- ・鶴藤鹿忠『岡山の民家』 日本文教出版 1965

博物館運営委員 文学部教授

徳島藩史と郷町の町人

吹 田 僚

1、近世の徳島藩

【藩政】徳島藩主蜂須賀家は阿波国（徳島）と淡路国（兵庫）を領有する外様大名である。尾張国蜂須賀村の国人、播磨5万余石の大名、蜂須賀正勝（小六）を祖とし、その子藩祖家政に天正13年（1585）豊臣秀吉より四国平定の功に対して阿波国17万余石を封ぜられ、慶長5年（1600）関ヶ原の戦いでは徳川家康方に付き、合戦後に改めて阿波国が与えられる。元和元年（1615）大坂夏の陣により戦功をたて、徳川秀忠より淡路国7万石余りが加えられ、25万7000石を領有することとなり、明治に至るまで2ヶ国を支配することとなる。

蜂須賀家は、豊臣、徳川幕藩体制の大大名として300年弱にわたり、阿波、淡路両国を支配し治めてきたが、6代宗貞から病弱な藩主が続き、家老達重臣が藩政を担っていた。出羽国秋田新田藩から蜂須賀家の養子となり、宝暦4年（1754）10代藩主となった重喜は、当時の徳島藩へのあいつぐ公儀からの普請役負担などによる藩財政の窮状を克服するため藩政改革に情熱を注ぐが、重臣たちの反発を招き対立を深めていった。重喜の藩政改革は困難極まり、特に藩の財政を支えていた藍市場に目をつけ、大坂市場をめざし公儀と対立することとなる。しかし明和6年（1769）公儀から江戸藩邸に閉門とな

り、その後国元に帰り隠居生活の身となった。

徳島藩の古い政治本質に対する藩政改革であり、経済的には一部成功したが、実をむすぶことは叶わなかった。その後、嫡子11代治昭と12代斉昌は藩政改革を進めていき、14代茂韻の時に明治維新をむかえることとなる。

【経済・産業】阿波国内では徳島城を起点とし五街道が整備され、初代至鎮の父である家政が、天正13年（1585）街道筋の要所九か所に支城を置き、軍事的制圧や藩外からの侵略に備え、また農民支配体制確立のため、支城の周辺に城付知行地を制度化していった。しかし元和元年（1615）の大坂夏の陣以降、泰平の時代となり、各藩に対しての徳川幕府による一国一城令が出され九か所の支城は取り壊される。その地域は経済活動の中核機能を備え、郷町としていろいろな産業が生まれ栄えた。特に周辺村落との経済的関係を持ち、地域支配の重要な役割を担うこととなった。

阿波国を代表する産業は藍であった。度重なる阿波国中央に流れる吉野川の氾濫で米作に不適切な吉野川流域の農村部では、早くから藍の栽培、加工が展開され、阿波北方の吉野川沿いの郷町周辺村落では商業的な藍作農家が生まれていった。そして阿波北方郷町の町人で藍商となり、莫大な富を手にした豪商達が藩の財政に大きく関わるようになる。

鳴門の撫養地方には広大な塩田が開発され、



写真1 徳島城鷲之門
徳島城跡は現在徳島中央公園として一般に開放されている。



写真2 藍縞帳：13cm × 17cm
(筆者所蔵：徳島県立博物館寄託)

富裕な塩田地主が生まれた。藍と塩という商品生産に藩は力を入れ奨励していったのである。他には三好郡山間部では煙草産業が生まれた。それに対して阿波南方の勝浦、那賀川流域は米作にめぐまれ、堅実な米収による農業経営が行われた。

【藩財政】全国で約300藩あった徳川幕藩体制時代、先にも述べたが、あいつぐ公儀からの普請役負担、参勤交代などで徳島藩も藩財政は窮乏した。特に1700年代半ば以降、領主的危機が進行した時代であった。これは徳島藩だけの問題ではなく、特に外様大名の諸藩にとっては苦しい台所事情であった。藩の赤字財政解消のため三都（大坂、京都、江戸）商人からの借銀による藩債に追われることとなる。中期藩政改革の中で、藩は藍商を主とする豪農、豪商に寄りつき「御銀主」を制度化して銀を調達上納させたのである。「御銀主」とは徳島藩独特の呼び名である。豪農、豪商は調達した金銀を上納するかわりに「苗字帯刀、夫役御免、城内御目見」が特権として与えられ、身居（身分）が武士級に格上げされたのである。安永2年（1773）藩内の豪農、豪商から35人の「御銀主」が選出され、一人辞退し34人から銀557貫（約9000両弱）を調達したが、借財返済に遠く及ばなかった。天明3年（1783）「御銀主」の総人数が51人とされた。徳島城下、阿波北方の豪農、豪商で8割を占め、その過半数が藍商であった。阿波南方でも廻船問屋を経営する者が多かったが、徳島城下に次ぐ商業規模のある郷町、富岡町の豪商 熊野屋吹田家は質屋業（両替商）や造酒業などで財をなし、藩内でも有力な商人で「御銀

主」の中でも上位に位置し、また藩主のために藩南方の「御本陣」も相勤めたのである。

【学問・文化】元禄期（1688～1704）に入り天下泰平の世の中、生活が安定し学問、教育が普及する。歴代蜂須賀藩主の政治上顧問役として儒者が藩の儒員として招かれ、藩主、藩士たちを学ばせた。

3代藩主光隆は合田昌因を京都から招き、5代綱矩は藩内の増田立軒を登用して藩士の就学を奨励した。立軒は6代藩主宗員まで（～1735）蜂須賀歴代藩主の事蹟を編年体にて記した『渭水聞見録』4巻にまとめ、さらに藩主の侍講も務めた。10代重喜は柴野栗山を、11代治昭は那波魯堂を招き儒員とし、寛政3年（1791）寺島に学問所を設け、士族庶民に入学を許可し学ばせた。

蜂須賀家の菩提寺は臨済宗妙心寺派の興源寺であったが、10代重喜は明和3年（1766）に眉山北側の万年山に儒教式の墓地を設けた。儒学を根本として藩政改革を断行した10代重喜の人間性が窺える。

文化、芸能面においては、人形浄瑠璃や今や全国的に有名なお盆の風物詩、阿波踊りがある。

人形浄瑠璃は上方（大坂）の人形芝居とむすびつき、長く阿波の各地方の農村に庶民芸能として拡がり、各地の神社境内にて建てられた農村舞台で祭礼などとして上演されてきた。

阿波踊りは昭和の初めに徳島観光協会が振興にのりだし現在の形となるが、18世紀半ば以降の宝暦年間に、あまり華美で飲酒、喧嘩が重なり、たびたび藩より禁令が出され、うち続いた凶作のため文久期の頃（1861～1864）に組踊り



写真3 鑑札：13cm×24cm 表・裏
（筆者所蔵：徳島県立博物館寄託）



写真4 阿南市富岡町天神祭りの阿波踊り風景

は消えて、ぞめき踊りがうまれた。明治維新の頃いったん衰えたが、日清、日露戦争の凱旋祝で復活する。

徳島県内の各市では、7月に夏祭りが開催され阿波踊りが演じられる。

徳島の阿波踊りを舞台とした、さだまさし原作の小説、平成19年(2007)映画化された「眉山」は松島菜々子主演、母親役には宮本信子が出演し感動の作品であった。

【一揆と御家騒動】元和元年(1615)大坂夏の陣が終わり、徳川幕府は泰平の世の中となってきたが、各藩内において大なり小なり農民と藩との衝突があり一揆が起こった。徳島藩も例外ではない。

徳島藩の阿波国では領地の半分ほどは米作ではなく藍作農村であった。先にも述べた様に吉野川沿いは度重なる氾濫により、米作には適さず藍という商品経済を生み出したのである。その様な米不足の藩であったが良質で高く売れる淡路米、南方の米などは大坂(上方)で売却され、藩内で不足する米は安く他藩から買入れ大きな利潤を加えて米不足の藍作地帯、徳島城下町や南方の海部郡などへ売り捌き、藩はかなりの利益をあげていたのである。このように藩の米穀専売制売付米の実施が行われ、農民の不満が爆発し百姓一揆もたびたび起きたのである。

藩内における御家騒動も幾度か起きた。寛永10年(1633)の益田豊後事件(海部騒動)、10代重喜の藩政改革に反発し、宝暦12年(1762)に起った山田織部事件、明治維新後の明治3年(1870)に旧筆頭家老稲田邦植を藩知事にしようとした淡路藩分置運動の「庚午事変」などがある。庚午事変後、明治政府は稲田家一族を北海道静内に移住させ決着をつけた。

平成17年(2005)吉永小百合主演で上映された「北の零年」は有名である。

徳島藩は阿波国を徳島県、淡路国を兵庫県として明治時代に入るのである。

2、阿波南方郷町「富岡町」の町人

徳島藩では徳島城下町の商業規模に次ぐ郷町は南方的那賀郡富岡町(現阿南市富岡町)である。天正13年(1585)蜂須賀家政の甥、細山帶刀(のち賀島政慶)が阿波九城の一つ牛岐城に配され、一万石を与えられ知行することとなる。

後に一国一城令により牛岐城は取り壊され、富岡町は阿波南方の政治、商業の中心地として栄える。

富岡町の有力な町人として熊野屋(屋号)吹田家があげられよう。筆者の先祖である。吹田家は慶長年間に紀伊国熊野浦よりこの地に至った。代々茂右衛門、興右衛門を名乗り、1700年半ばぐらいから頭角を現し、主に質屋(地域の両替商)酒屋業を営み、質地地主として小作人から米収(年貢)をあげていた。1700年後半の安永期、天明期に事業を拡大し、この頃、屋敷1,500坪、田地からの米収1,000石、資金量3,000両であったと市史に記されている。(『阿南市史』第二巻より)

吹田家は「御銀主」として藩財政救済のため藩へ銀30貫前後をたびたび上納した。その見返りとして、十人扶持、永代八人扶持という武士格の身居(身分)を拝領した。



写真5 藩との「覚書」「証文」文書
(筆者所蔵：徳島県立文書館寄託)

藩主南方鷹狩のため、11代治昭の命により、天明4年(1784)吹田家は本陣を自前にて普請することとなったのである。この頃は藩内では一時的な本陣はあったが、吹田家本陣は恒常的な本陣として藩主が使用し、明治4年(1871)まで「御本陣」の役を相勤めた。この間、6代与右衛門が役所に提出した記録によると、藩主またその家族が22回逗留している。

吹田家には、天保15年(1844)8月に6代当主茂右衛門によって作成された『御上、賀島様』『歳々御結構書拔』の資料がある。16cm×23cmの大きさと70頁にまとめられた和綴じ本である。儒学者で、医者でもある高橋赤水の序

文から始まり、初代当主（1616～1690）からの事蹟が記されている。特に3代当主（1688～1763）からは事細やかに記され、家の歴史が窺える。明治時代に入り7代当主（1809～1885）からの事蹟を9代当主儀平（1865～1934）が7頁において追記している。

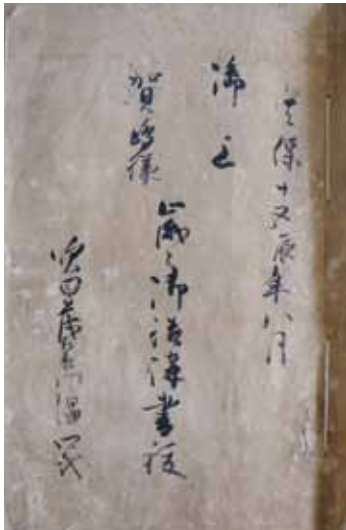


写真6 天保15(1844)
『御上 賀島様』
『歳々御結構書拔』
(筆者所蔵)

3代当主興右衛門が10箇条の遺言書を4代当主興右衛門に託している。3代で吹田家の基礎を築き、後世への切なる思いが込められ、事細やかに記されている。御公儀様(徳島藩)への忠誠心、商売に対する心構えや、金の貸付時の留意点、使用人には情を接して気配りをする事などが記され、吹田家においては貴重な資料である。



写真7 3代当主興右衛門(1688～1763)遺言状
(筆者所蔵：徳島県立博物館寄託)

徳島藩から財の力にて、地位、名誉、既得権益を得て繁栄した町人吹田家、地域社会に支えられながら、家を維持し繁栄させてきた。明治、大正、戦前の昭和まで、江戸時代程の繁栄ではないが、地元の有力者であった。敗戦後の農地改革により不在地主であった吹田家は屋敷地だけを残し、すべて失った。屋敷地も半分となり、本陣建物、蔵屋敷一棟のみ残しすべて処分された。平成17年(2005)筆者の母親が亡くなり、

筆者の手で平成25年(2013)11月6日、400年続いた吹田家の歴史に幕を閉じたのである。

奇しくもその日から徳島県立博物館で『富岡町本吹田家の歴史』の部門展示が始まった。

この展示にご尽力していただき、お世話になりました学芸員 松永友和氏に心から謝意を表します。



写真8 本陣庭から壱之間(御殿之間)を望む



写真9 式之間から壱之間(御殿之間)
(天井は高く、部屋内の壁はすべて弁柄)

参考文献

- ・『富岡町志』『阿南市史』第2巻・1995年
- ・泉 康弘「阿波藍商資本と徳島藩御銀主制度」多田 伝三先生古稀記念論集刊行会編『阿波文化論集』、1978年
- ・松永友和
「阿波国那賀郡富岡町吹田家文書について」
『徳島県立博物館研究報告』25号、2015年

◆ 博物館だより

◇平成27年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	26	24	27	23	4	8	26	25	21	19	17	15	235
入館者数	1,190	2,007	1,147	479	3,338	80	718	894	435	415	404	446	11,553

◇平成27年度春季企画展として「なごみのガラスー坂崎幸之助 和ガラスコレクション」を4月1日から6月30日まで開催し、6,800名の方にご来場いただきました。和ガラスコレクター坂崎幸之助氏が30年以上にわたり蒐集した、明治から昭和前期を彩った和ガラスや、紫外線をあてると光の器へと変化していくウランガラスなど600点近い品々が展示されました。なお、この企画展は、今年11月に迎える関西大学創立130周年記念事業の一環としても位置づけられ、関西大学STEPプロジェクトとの共催で開催されました。関連催事として、5月14日に講演会「和ガラスの歴史と美ーびいどろ・ギヤマンからガラスへ（坂崎幸之助コレクションに寄せて）」（講師：神戸市立小磯記念美術館、神戸ゆかりの美術館館長 岡泰正氏）が開催され、参加者は98名でした。



◇今年度も資料の取扱いを実践的に学ぶ「博物館実習実践研修会」を開催しました。河内國平氏・河内晋平氏による日本刀研修（6月25日）、伊藤健司氏による保存科学研修（6月27日）と、小島伸治氏による友禅染研修（7月5日）を企画し、あわせて85名の参加者を数えました。



◇博物館キッズミュージアムを7月26日（書道教室）と8月2日・3日に実施しました。今年も、本学カイザーズクラブの参加もあり、3日間で2,160名の皆さんに賑やかに楽しんでいただきました。

◇本年度上半期に鶴飼啓三氏から江戸時代の具足鎧櫃一式、遠藤順昌氏から中国古代銅鏡21点、朝鮮古瓦1点、青銅壺1点の合計23点、高橋孝子氏から孔雀縫い取り小紋1点と本金箔名物裂間道1点、宮原欣次氏から「御大禮記念」（大正天皇即位式記録）1冊、遠山慶一氏から書画掛け軸7本の寄贈がありました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

◇関西大学創立130周年記念展示会「関西大学のちから」開催準備のため、7月1日から10月4日まで全館休館しました。

．．． 編集後記 ．．．

表紙は、本館所蔵の赤色あやめ文氷入（明治～大正期）です。内側にあやめの模様が入っており、清々しさを感じさせます。坂崎幸之助氏の和ガラスコレクションと一緒に展示されました。

平成28年9月末にて、第6代博物館長 長谷洋一文学部教授が、退任いたします。在任中の関係各位のご支援ご厚情に感謝いたします。10月からは、米田文孝文学部教授が博物館長に就任いたします。前館長同様、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

関西大学創立130周年記念展示会「関西大学のちから」を10月5日から11月14日まで、本館と大阪歴史博物館の2会場で同時に開催いたします。大阪歴史博物館では、本館所蔵の重要文化財や重要美術品が学外で初めて一挙公開されます。

